

● 審査委員特別賞 ●

「受け手」から「送り手」へ

うえやま りな
上山 莉奈

そのへ
南丹市立園部中学校3年(京都府)



私の祖父は、シベリア抑留者だった。満州で終戦を迎え、抑留されたあと、3、4年強制労働に従事し、引き揚げ港の舞鶴に帰ってきた。極寒の中、時にはねずみや犬を食べ、一緒にいた仲間が亡くなっていく様を間近で見て、生き抜いた。その生活は私たちの想像以上に辛く、悲しく、苦しいものだったに違いない。でも、今はもう居ない祖父は、その時のことをあまり話したがらなかったそうだ。一番つらい経験は、一番忘れてしまいたいものなのかもしれない。でも、だからこそ、今の私たちは、知るべきなのだと思う。

北方領土に暮らしておられた元島民の方の話を読んだ。やっと戦争が終わったと安堵していたのに、強制的にふるさとを追われ、樺太への乗船時にはクレーンでつり上げられた。収容所での生活は劣悪を極めた。栄養失調や肺炎で仲間が次々に倒れ、亡くなっていった。そのさまを、彼らはどんな思いで見ているのだろうか。そして、それから70年余り、たくさんの思い出が詰まった島に帰ることができないまま、時間だけが残酷に刻まれてしまっている。もし、私ならどんな気持ちになるだろうと自分に問いかけてみるが、想像ができない。それほど、この問題は人の人生を狂わせている。取り返そうにも取り返せないものが、この問題にはある。

一方で、次のような危惧すべき状況があることも知った。それは、北方領土問題に対する国民の意識の低下である。特に若者世代の関心度が下がっているというのだ。自分が苦しいとき、周りの人に放っておかれたり、忘れられたりするほど悲しいことはない。北方領土問題に対する無関心は、元島民の方々をさらなる孤独と悲しみに追いやる行為であるとともに、国民の後押しがなくなるということは、この問題の解決を更に遅らせる原因ともなる。

祖父のシベリア時代を、私は祖母から聞いた。祖父は

あまり話したがらなかったのに、どうして祖母は私に話したのか。「二度と、戦争という過ちを繰り返してほしくない。今の平和を守り続けてほしい。」戦後70年以上が過ぎ、シベリア抑留の事実も戦争への思いも変化し、忘れさられてしまうではないか。その強い思いで、祖母は話してくれたのではないか。私の父が19歳のときに祖父は亡くなっている。祖父の話をするということは、祖母にとっては悲しい記憶をたどるということだ。それでも、話してくれた祖母の思いを私は、絶対に無駄にはしてはいけない。

祖父のシベリア抑留と北方領土問題は、それぞれ別の問題だが、私の中では大きく重なる事柄だ。70年余りも前のことだが、今も多くの人を苦しめている。それなのに、日本人はこの問題を忘れ、関心を失いつつある。それが当事者をさらに深い悲しみに突き落とし、この問題の本質を見抜き、解決する方向から離れさせてしまうことになるのだ。

私の祖父は舞鶴に引揚げた。その地域にある中学校では、引揚げの語り部を養成しているそうだ。恐らくほとんどの中学生が、戦争や北方領土問題について学び、その時は深く考えたとしても、それを「受け手」として聞くだけで終わってしまう。でも、彼らはさらに学び「送り手」として活動している。それも多くの申し込みがあるというのだ。私はこれを聞いて驚いた。

私たち中学生には、何もできないと思っていたけれど、できることはある。無限大にあると思えた。私は、北方領土のこと、シベリア抑留のことを学んで、「受け手」となった。でも、ここで終わりにしたくない。私もさらに学び、「送り手」になりたい。祖母の思い、元島民の方々の思いを身近にいる人や、次の世代の人たちに伝え、継承していきたい。